



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国映画における分身の表象に関する史的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	王, 玉輝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13815号
Issue Date	2019-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76899
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wang_Yuhui_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：王 玉輝

	主査	教授	応	雄
審査委員	副査	教授	阿部	嘉昭
	副査	准教授	浅沼	敬子

学位論文題名

中国映画における分身の表象に関する史的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

自国の近現代文学・文化における分身に関する研究書は多くの国で刊行されている。それにたいし、中華圏ならびに欧米や日本で展開されている中国近現代文学・文化の研究領域では、分身表象に関する研究は決して充実しているとはいえない。研究論文が寡少であり、まとまったかたちの研究書がいまだに出版されずにいるのが現状である。現実を重んじる儒教思想の支配や、近代以降の社会的・政治的状况に由来する諸制限などがアンチ分身ともいえる土壌を形成しているのかもしれないが、近現代中国の文学・文化に分身を取り扱う作品がなかったわけではない。また、だからこそ、文学史や映画史において断続的に姿を現し、とりわけ近年の映画作品に高頻度で登場する分身事象を系統的に描き出し、そうした事象に史的考察を加えること自体が、すでにアンチ分身の風土にたいする反動・反省を示す身振りであり、人文学研究に携わる者の批評的態度表明といえる。

中国映画における分身の表象をテーマとする本論文は、該当作品における分身表象の検討、分身表象の歴史的系譜の整理と考察、外国の事例との比較等の諸作業を通して、映画というジャンルに限定するものではあるが、中国映画史の研究分野、ひいては中国近現代文学・文化の研究領域において、分身の表象に関する系統的な考察を行なう初めての試みであり、研究テーマの選択からしても人文学的価値を有すると認められる。

また、中国映画における分身の表象を具体的に検討するにあたって、本論文はナラティブの次元での人物像の構築に目を向けるだけでなく、分身の諸事態が映像と音声においてどのように表現されているかについても仔細な分析を施し、映画にこそ存しうる分身の表象に正面から取り組む。そうしたアプローチも評価に値する。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は上述の点において論文の達した成果を評価する。いっぽう、審査委員会は論文に残る問題点についても具体的に指摘した。第一に、本論序章で分身という概念の定義づけは行われているが、物語を有すると同時に視覚的メディアでもある映画の分析に適用するにあたってはさらなる概念の精査、整理が必要ではないかという指摘があった。第二に、外国の事例との比較がなされているものの、分身はドイツをはじめとする欧州諸国の近代文学・文化に深くかかわる事象であるだけに、当該事例を検討するに際しこの側面をめぐるさらなる精査・吟味が望ましかった。第三に、学位申請者の指摘する、演劇における俳優の役柄とそこからの分離、双子の物語構造などに中心化される中国映画の分身表象の特徴は、本来のアイデンティティ・クライシスと接合される「不気味なもの」(フロイト)の主題と離れており、それらを「分身」と見なす立脚のより詳細な説明が十分とはいえない。技法分析においても多重露光に観点が集中しているが、後ろ姿など俳優の「吹き替え」のもつ不安・いかがわしさについて、また、映画のカッティングそのものが原理的に人物の分裂・乖離を喚起するという点について、より重層的な考察を行なう余地が残る。上記の点以外に、審査委員会は文献を挙げる際により細心に注意すべき点や、厳密に表現を推敲すべき箇所などに関しても指摘した。

審査委員会はこれらの問題点は主に、本論文の取り組む研究課題の新規性と、論文執筆者が中国映画における分身の表象というこれまでなされてこなかった研究テーマに関する論考を意欲的に構築しようとする姿勢に伴う瑕疵であったことを、口頭試問をへて確認した。本論で取り上げられた中国映画が見せた分身表象の特徴的な点に関する記述において精度を上げる余地が残る点は、外国の事例との比較研究が不十分な点とも連動するが、これらの問題点に関し、学位申請者は十分に認識しており、今後の課題として改善意欲を示している。以上を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。